

# 「チャイルドケアリング・デザイン」

小林 登 (日本子ども学会 代表)

子どもは、生物的存在として生まれ、社会的存在として育てられる。生命誕生から始まり、成人に達するまでの成長・発達にあたって、親や大人たちの適切な育児・保育・教育がなければ、子どもはいつでも、どこでも危機にある。すなわち、心や体の障害を起こしたり、病気になったりするのである。“Children at risk, whenever and wherever.”と言える。

したがって、子どもを取り巻く生活環境の全ての「モノ」や「コト」は、子どもの目線に立って、子どもの心を読み取る優しい心でデザインしなければならない。これを、「チャイルドケアリング・デザイン」“child-caring design”と呼ぶ。「チャイルドセンタード・デザイン」“child-centered design”という言葉もあるが、「ケアリング」の方が、なにか心がこもっているような気がする。“care”には「世話する」という意味だけではなく、「気にかける」、「考える」、「心配する」、あるいは「愛する」というような意味があるからである。ご存知の通り、“child care”となると「(有料の)保育」のことである。

全ての「モノ」や「コト」を「チャイルドケアリング・デザイン」すると漠然と述べたが、「モノ」とは都市、家屋、遊具などの構造物で代表されるハードウェアであり、「コト」とは制度とか教育の仕方・あり方で代表されるソフトウェアである。現在の「子ども問題」“child issues”を見ると、子どもに関係する全てを「チャイルドケアリング・デザイン」し直す必要があると考える。

思いつくままに、「チャイルドケアリング・デザイン」に関係する「子ども問題」“child issues”を考えてみよう。

「ハード」な面ではまず、子どもの事故と関係した「チャイルドケアリング・デザイン」を考えなければならない。わが国を含め、先進国での子どもの死因の第1位は「事故」である。その昔は、下痢、肺炎などの感染症だったが、今では交通事故、お風呂や海水浴での溺死で、多くの子どもが命を失っているのである。六本木ヒルズの回転ドア事件を憶えておられるだろうか。高層ビルで、外の空気を遮断して人が出入りできるようにと回転ドアをつけるようになったが、それがあまりにも立派なものになり、慣性が大きく、入ろう

とした小学校入学直前の子どもが、頭部をドアに挟まれて亡くなったという痛ましい事故である。これを受けて、建物や遊具などのメーカーが「キッズデザイン協議会」を作り、「チャイルドケアリング・デザイン」に注目するようになったことは、喜ばしいことである。この10年来、WHOでは「事故」に“accident”という英語を用いなくなった。“accident”には、偶発的で「防げないもの」の意味があるからである。代わりに、「外傷」、「受傷」の意の“injury”を用いている。これからは、ますます「チャイルドケアリング・デザイン」の必要性が高まるであろう。

「ソフト」な面で問題になるのは、育児・保育・教育での「チャイルドケアリング・デザイン」であろう。育児での最大の問題は「子ども虐待」であり、保育では、特に都市部においては施設の不足であり、教育では「いじめ」などの教育問題である。いずれも国を挙げて対応しているが、効果は上がっていない。児童相談所での「子ども虐待相談対応件数」は増加の一途をたどり、2008年には4万件を超し、1990年の約40倍に達している。また、地域によっては、保育所・園に入園を希望する待機児童数も減少していない。学校では、「いじめ」はまだしも、「不登校」が増加している。どこかが悪い、何かが悪い。このままでは、日本の未来は危うい。原点から考えた「チャイルドケアリング・デザイン」が必要なのである。

欧米先進国に比べればまだまだ良いとは言われるが、なぜ、わが国でこのような子ども問題は起こるのであるか。個人的には、豊かな社会、特に物質的に豊かな社会の陰の部分として、このような問題が起これると考えている。

この問題を考えるため、ここでMacLeanの「脳の三位一体説」を私なりに説明したい。人類は、長い進化の歴史の中で、魚や爬虫類のような脊椎動物になって、運動そして呼吸・循環など、生命維持に必要な体のプログラム中心の「生存・運動脳」と呼べる脳の原型を持ったと言える。われわれの脳の間脳や脳幹、さらには脊髄にあたる。

そして、原始哺乳動物に進化して、その体のプログラムの働きを強化し、たくましく生きるため、本能（食欲・性欲）、情動（優しさ・怒りなど）の心のプログ

ラムを持った旧皮質（大脳辺縁系）が「生存・運動脳」をカバーして、「本能・情動脳」を進化させたと考えられる。食欲の心のプログラムは体をつくり、性欲のそれは子孫を増やし、優しさや愛のそれは関係の維持に、そして怒り・恐れのは他の動物を捕り、生きるために必要だったと言える。

さらに、高等哺乳動物になって、知性・理性の心のプログラムを持った新皮質が「本能・情動脳」をカバーして、「知性・理性脳」に進化した。それによって、環境に適応し、他の動物との関係も考えて、上手く、良く生きることができるようになったと考えられる。その最も進化し、前頭葉に人間としての心のプログラムを持った脳が、われわれの脳である。心のプログラムは体のプログラムの働きを強く良くするために進化したが、人間は、文化・文明まで持つことはできても、残念ながらまだ戦争は止めることができない。

われわれの「知性・理性脳」が創り出した科学・技術のおかげで、生活廃棄物が山のように出るほど物質的に豊かな社会となったが、同時に、血縁関係者、家族関係者は別としても、少なくとも他人の助けは無くても生きていけるようになった。昔は、天ぷらのようなご馳走を揚げると、「隣のおじさんのところへ持って行きな」と、小皿にのせて酒の肴に一品加えるという人間関係があった。現在の社会では、もうそれはいない。むしろ煩わしいのである。そんな社会では、人類が長い歴史の中で進化させた優しい心、思いやりの心、共感の心のプログラムは退化してしまうのではなかろうか。したがって、人間関係が希薄になる。その上、資本主義の悪い面ばかりが強く影響し、物質万能主義、拝金主義までが加わって、ますます事態を悪化させていると言える。また、民主主義の影響で、現在の社会には行き過ぎた個人主義が底流としてあることも関係しているかもしれない。

上述の考え方からすれば、現在の子ども問題解決に求められるものは、まさに「チャイルドケアリング・デザイン」である。しかし、多くの問題はいくつかの要因が複雑に絡み合っていて、「チャイルドケアリング・デザイン」をデザインすることは簡単ではない。当然のことながら、その理念として、皆で考える「子ども学」“Child Science”の果たす役割は大きいのである。「チャイルドケアリング・デザイン」を考えるために「子ども学」があるとさえ言える。

また、「チャイルドケアリング・デザイン」には「情

報」の果たす役割が重要なので、特に大脳辺縁系の働きを考える必要がある。なかでも、ソフトの「チャイルドケアリング・デザイン」には必須であろう。換言すれば、子どもにとって必要なのは、「感性の情報」による「生きる喜び」“joie de vivre”であり、「子ども学」の中に「子ども生命感動（情動）学」“Child Emotinemics”の柱も立てる必要がある。

〈参考〉

Paul D. MacLean, The Triune Brain in Evolution: Role in Paleocerebral Functions, Plenum Press, NewYork, 1990

本原稿の作成にあたっては、CRN (<http://www.crn.or.jp/>) の北田智子氏の協力をいただいた。深謝申し上げる。

